ひとめぼれ

ＹＵＩＫＡ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひとめぼれ

【Ｎコード】
Ｎ２４５９Ｚ

【作者名】
ＹＵＩＫＡ

【あらすじ】
普通すぎる女子高生みあ。
男には興味がなかったはずなのに
一瞬目が合っただけのはずのヤンキー秋斗に興味を抱き．．．

キミの瞳。　―　みあｓｉｄｅ　―

私、須藤みあはすんごく普通の女子高生。
ん～どれ位かって言うと・・・
え？こんなに普通な人居たんだ。
って感じかな（笑）

「ふぁあ～・・・・・・ん・・え？！」
うん。もうお分かりだろう。
私はたった今遅刻をした。
え？なんでたった今かって？
それはただ今、８：４０。
学校ではちょうど担任が「席につきなさ～い」なんて
誰も聞いてないこと言ってる頃だな。・・・うん。

遅刻してしまったらもう慌てたりしない。
だって無駄ぢゃん！！（笑）
「悠おはよ～・・・。」
「おはよ・・・ってお前まだ行ってなかったの？！」
「寝坊したのさ（笑）」
「したのさ、ぢゃねーし！送ってってやるから早く準備しろよ。」
悠は５歳年上のお兄ちゃん。
いまは２１歳・・かな？
「はぁ～い。」
ちょっと年が離れてるからかな？
悠は私に甘い。
見た目いかついのに、なんか面白い。

「悠～準備万端です！！」
「お前さ、髪どんだけ頑張っても無駄だって。」
「あ・・悠、今から車の免許もらって来て。」
「イヤ、無茶言うな。」「はい。」
悠はバイクの免許しか持ってない。
ヘルメットかぶるし、風で巻きもとれるし、
うん、私の３０分はなんだったんだろう。
「お前落ちんなよ？」「もう慣れたで大丈夫。」
絶対近所迷惑だろうな、って音を出して走り出した。

着いた。・・でも授業中に教室に入るのだけは避けたい。
でも悠の瞳は、今すぐ教室行け。って言ってる。
「ありがとね。い、行ってきま～す・・。」
悠はまたすごい音を出して去っていった。
うわぁ・・・いろんな教室からバイク音を聞いた生徒が
物珍しそうにこっちを見ている。
・・・さあ、どこで時間を潰そう・・。（泣）
かと言って、そんなに時間があるわけではない。
「はぁ、なんで送ってくれるのに起こしてくれないんだろう・・。
」
悠への不満をつぶやきながら近くの公園まで歩いた。
公園の自動販売機でお茶を買った。
ベンチに座ってお茶を一口飲んだ。
「暑いなぁ～」
もう7月だ～。
部活もやってないし、特に趣味とかないから土日はほとんど時間
の感覚がない。
そのせいか、高校に入学してから時間の経過がとても早く感じる。
夏休みもあと少しのとこまで来ている。
そろそろ彼氏も欲しい季節だな・・

夏祭りも花火も海も、友達とだって楽しいよ？
でも、やっぱ彼氏と見たい年頃なのさ（笑）
「そろそろ行くかな。」
遅刻した時って教室に向かう足がすっごい重い。
教室に入ったときのみんなの視線を考えると、
こころなしか頭が痛くなってきた．．．

なにを思っててて進み続けた足は教室までつれてってくれた。
「ふう～！」
放課でざわめいているはずの教室はこんな日に限って
わりと静かだった。
ガラガラッ
思い切って勢いよくドアを開けた。
「みあ～遅いよ～」
「ごめん～寝坊した（笑）」
杉山桃花は高校で一番最初にできた友達で、
すんごくかわいい。
容姿もだけど、とにかく天然なとことか仕草とかｔｈａ女の子って感じだね。
「みあ偉いねぇ～千晴なら絶対休んでる！」
イヤイヤ、自慢することじゃない。
峰千晴は中学校からの友達。
口下手で、のわりに思ったことは誰にでもぽんぽん言う。
顔立ちはきれいなんだけど、その性格のせいで千晴をよく思う人は少ないけど、
友達を絶対に裏切らない。そんな千晴が大好き。
「みあ～今日悠くんに送ってもらったんだね～いいな～。」
桃花は悠のことが好きらしい。
私的には気まずいからやめて欲しいんだけどね。
「あんまよくないよ～髪かなりひさん（泣）」

「ホントだ！みあの髪おもしろい！」
なんて話してたら授業開始のチャイムが鳴った。

私の席は窓側の後ろから2番目。
お気に入りの席。なんでって、退屈しないから。
外を見れば空もあるし、グランドも見える。
人間観察が好きな私には、特等席。

「・・いいか～？テストの範囲今のうちに言っとくからな～？」
やる気のない先生の声はもう聞き飽きた。
「はぁ～・・・・・・・・。」
あ、誰か登校してきた。
誰だろう・・？先輩かな？
制服を着崩しているはずなのに、みっともないと言うよりかっこいい。
髪・・きれいな金色・・・。
・・・って、あれ？校則で髪って染めちゃだめって・・
あ、ヤンキーなんだ。
そう思ったとき、目が合ってしまった。
こう言うときの人間の反射神経ってすごいよね。
気づかれたか気づかれなかったか分かんないけど、
目が合ったのは一瞬だった。
でも私の脳裏には強くて鋭くて、どこか寂しそうな目が残っていた。

私は初めて男の人に興味がわいた。

キミの瞳。２　―　みあｓｉｄｅ　―

「きり～つ。　礼。」
いつのまにか授業は終わっていた。
千晴は彼氏と弁当を食べるのでこの時間は桃花と２人きり。
「おっ弁当～おっ弁当～♪」
桃花あの人のこと知ってるかな？
「てかさ、この学校の金色の髪の怖い感じの人・・」
「真田秋斗先輩？」
・・・やっぱ有名なのか。
「秋斗先輩がどうしたの？」
「いや、さっき目が合っただけだよ。」
「秋斗先輩イケメンなのに彼女作らないんだよ～カッコイイ！」
「へぇ～」
確かに整った顔してたな～。
んまぁ、私には関係ないけどね。

帰りのＳＴが終わり、桃花と千晴と帰ろうとしたら担任に呼び止められた。
「みあ～ちょっとおいで～？」
なんか悪いことした？！・・・あ、今朝のことか。
２人には「ごめん、先帰ってていいよ！」と言い残して担任のとこへ走った。
遅刻の理由とか、バイクの持ち主は誰か、とかいろいろ聞かれた。
でも全部話したら「次はもっと静かに来なさいよ～」とだけ言われて、

とくに叱られはしなかった。
その代わりに掃除やらなんやら雑用をかなりやらされた。

ふと時計を見ると7：４３をさしていた。
「暗いし・・・。」
ケータイを見ると何件か着信があった。見なくてもわかる。
１２０％悠だ。
「帰ろ・・・。」
かばんを持って誰もいない廊下を歩いた。
少し暗いだけなのに昼間と全く違う場所のように思えた。
「せんせぇ～かえりまぁす。」
とだけ職員室に声をかけ昇降口に向かった。

暗い夜道は嫌いぢゃない。
昔っから暗いとこや狭いとこは好きだった。
だから昼間よりも好きなくらい。
「帰ったら悠に叱られるな・・・。」
悠は私の親代わり。のつもりで私をいつも守ってくれる。
もうそんな年ぢゃないんだけどね？（笑）
でもすごく感謝してる。
ママは私がまだ小３ぐらいで家を出ていった。
ママが出ていった原因はパパ。
仕事でなかなか家に帰って来ないのと、浮気をしていたから。
今は悠と私のために仕事を頑張ってるらしく、
なかなか家には帰ってこない。
仕事で帰ってこないなんて今さら信じられないんだけどね。

「はぁ～・・・。」
私の住んでる町に一つだけあるゲーセン。
昼間は安全なんだよ？

だけど夜にはヤンキーのたまり場になる。
今日だって・・・５，６人くらいのヤンキーがたまってる。
こう言う時はなるべく存在感消すのが１番！
早足で通り抜けようとした。　「ね～ね～。」
ビクッ！
お、おかしいな・・・？今日の運勢２位のはずなのに・・・。
「あ・・・はい？」
・・ん？この人どっかで見たことがある気が・・・
「やっぱみあぢゃーん！」
「え？」
誰だっけ・・・？
「え？ってまさか忘れられてる？！同じクラスなのにな～」
同じクラス・・・？・・・・・・・！！
「あ！新崎一輝くん？」
「そ～だよ～！忘れんなよ～」
「ご、ごめんね？」
「ぜ～んぜん！てか今帰り？」
「え？あ、うん！」
早く帰らないと悠が・・・
　「一輝～誰だよその子～」
ヤンキーの集団が冷やかしてくる。
その中に１人黙ってタバコ吸っている知ってる顔があった。

明るくて艶のある金色の髪。
整った鼻、口。
どこか忘れられない瞳。
・・・　秋斗先輩だ。

「み～あ～？どした？」
あ、いけないいけない！

「ゴメンね？私門限あるから帰るね！」
気づいたら一輝くんにそう言って走り出してた。
門限なんてとっくにすぎてるのに・・・。

「ただい・・・」
「おかえり。」
げっ！悠・・・
「どこほっつき歩いてた？」
「ちがうからね？悠のせいで担任に雑用させられてたの。」
「人のせいにするなよ。」
「悠のポンコツバイクがうるさいから注意されたんです～」
「元はといえばお前の寝坊が悪い。」
う゛・・・・。
「明日からは気をつけます・・・。」
「飯できてるから、着替えて降りて来いよ。」
「はーい。」
悠のごはんとか久しぶりだな。
いつもは私がごはんを作っている。
でもたまに私の帰りが遅いときとかは悠が作ってくれる。
あんまり上手とはいえないけど、私は昔っから悠の料理が好き。
作るのはいつもカレーだけどね（笑）
「今日もおいしい！」
悠は照れくさそうに私から目をそらした。

食べ終わって部屋に戻ってケータイを開くととメールが来てた。
『みあ～（＾＾）／／』
一輝くんからだった。
あ、私アドレス教えてたんだ。
『どうしたの？』
『ちょっと会わない間に可愛くなったね♪』

こんなに分かりやすいお世辞なんてないと思う。
『そんなことないよ（泣）』
『てかさ、みあ彼氏いんの？』
彼氏って言葉を聞いてなぜか秋斗先輩を思い出した。
『いるわけないよ～（泣）』
『そうなんだ～！ぢゃあさ、俺と付き合わない？（笑）』
ん？ヤンキーってこう言う冗談よく言うのかな？
『冗談やめてよー！（笑）』
『冗談じゃないよ？俺、みあが好き。』
思考回路がグチャグチャだ・・・
なのにまた頭には秋斗先輩が浮かんだ。
『返事は今すぐじゃなくていいから。』
そうメールは続いてた。
私は気まずくってメールをかえせないまま次の日を迎えた・・・。

キミの髪。　―　秋斗ｓｉｄｅ　―

「・・・だりぃ。」
つか、眠みぃ。
「昨日ちょっと騒ぎすぎたな。」
学校なんて行く気はなかった。
星矢からしつこくメールが来なかったら
今頃俺は家でテレビでも見てる。
うるさい親は俺にはいない。だから楽。

『秋ちゃ～ん！おはよ♪星矢くん、秋ちゃんを待ってるから～！』
『秋ちゃ～ん！まだ～？早く学校きてよ～！』
『秋ちゃ～ん・・・僕寂しい・・・』
朝っぱらから何件返信の来ないメールしてんだよ。
どんだけ暇なんだよ。

星矢とは物心ついた頃からずっと一緒にいた。
どんだけウザい事してきても、
こいつは俺の大事な連れだ。

世間のやつらは俺たちを偏見の眼差しでしか見ない。
それは仕方ないことなのかもしんねぇ。
一般的に言う俺たちは“ヤンキー”だから。
普通のやつらは近寄ろうともしない。
親だってそうだった。
だから一人暮らしを始めた。
センコーだって俺らにはなんも言っては来ない。
ありがたいっちゃありがたい。

校門の前に着いた。
星矢に『来た。』とだけメールをして校舎に向かい歩いた。
改めて校舎を見て思った。ぼろいな。てか汚ねぇ。
ある一つの窓で視線が止まった。

誰かがこっちを見てる。
黒い綺麗な髪をした女だ。
肌がすげぇ白い。
その女はめが合った瞬間はっとしたようにそらした。
なんか、気になる。
その気持ちのまま星矢達の待つ屋上へ向かった。

「秋ちゃ～ん！！やっと来てくれたね～！」
「お前、秋ちゃんって誰だよ。」
「秋ちゃんは秋ちゃんでしょ～？」
こいつ、ふざけてるな。
俺は軽く星矢を殴った。
「秋斗遅ぇーよ。」
この日は珍しく恭介も来ていた。
「お前が来てるなんて珍しいな。」
「今日たまたま暇だったんだよ。」
こいつは女遊びばっかしてる。
朝も夜も平日も休日も関係ねぇ。
ずっとだ。
「お前が女絶やすなんて珍しいな。」
「そんなんじゃねーよ。」
「恭ちゃんは五股がばれて、今日予定していた女の子にビンタされたんだって！」
自業自得だな。俺は涙が出るくらい笑ってやった。

「今日このあと一輝たち呼んで遊びにいくよ～・・・・」
またか。
遊びに行くって、どうせあそこしかねぇんだろ。
「ゲーセンに！！」
やっぱりな。
「俺はパス。」
こういうのは早めに断っとくのが一番。
断るのは直前になるにつれてめんどくなる。
「秋ちゃん。今日断るのは許さねぇよん？」
は？今日はって・・・あ～今日は星矢の誕生日か。
「わかったわかった。」
自分の誕生日を自分で率先して祝うのはどうかと思うがな。

そのまま屋上で少し星矢達とばか笑いしながら時間を潰して、
ゲーセンに向かうことにした。
ゲーセンに着き、テキトーに遊んでたら一輝たちが来た。
「星矢くん遅れてすいませんッ」
一輝は中学からの2コ下の後輩。
「おせぇーよー！」
一応同じ高校けどこいつはバイトばっかで本当に見ない。
「すいませんッ今日もバイトで・・・」
こいつはチャラけてはいるが、礼儀もなってる。
すげぇいいやつだと思う。
星矢にペコペコしてる一輝を笑いながら外に出た。
とくにすることもねぇ。
座ってたばこを取り出して火を付けた。
もう暗くなってきた。
「あ！」
急に一輝が立ち上がり一人の女のもとに走っていった。
何話してんのかは聞こえねぇ。

でもゲーセンの電飾で照らされた女の顔には見覚えがあった。
今日目が合った女だ。
困ったような戸惑ったような女の顔にトクンと胸が鳴った。
周りのやつらはひゅーひゅーとか言って冷やかしている。
一輝の女なのか？
あれ・・・？俺、なんで嫉妬してんだ？
するとまた一瞬女と目が会った。

透き通るような白い肌。
ピンクの小さい唇。
すぐ折れちまいそうな腕。
包めそうな小さい体。
そして黒く艶のある髪。

女は目をそらすと走っていってしまった。
俺、そんな怖いか？
一輝はその女を見送って戻って来た。
星矢がニコニコしながら一樹に聞いた。
「あのコ誰だよぉ～？」
一輝は少し顔を赤くした。
やっぱ、付き合ってんのか？
「そーゆうんぢゃないですよ？高校のクラスメイトです。」
・・・あれ？俺、安心してる？
「でも・・・・」
そのまま一輝は続けた。
「こんなんかっこ悪いんすけど、俺、アイツのこと好きなんです。」
周りのやつらは一輝を冷やかし続けた。
俺はそれでもあの女のことしか頭になかった。
俺、がらにもなく一目惚れしたのか？

「んで、あのコ名前なんて言うんだよ。」
「みあです。須藤みあ。」
みあ・・・。
「悪ぃ。俺帰るわ。あ、星矢、誕生日おめでと。」
そのまま俺は家に向かった。

キミへの想い。　ー　みあｓｉｄｅ　ー

「よし！」
今日はなんか早く目が覚めた。
私は着替えてキッチンへ向かった。

「行ってきま～す」
悠、まだ起きてないけど今日は時間早いしほっとこ。
ごはんも弁当も作っといたし、文句はないよね？（笑）
・・・にしても今学校に行ったら早すぎるかな？
学校までは歩いて４０分くらい。
自転車でもいいらしいけど、歩きの方がすき。
いつもは７：５０くらいに家を出るけど、
この日は６：３０少し前に家を出た。
部活やってる人たちと同じくらいの時間かな？
何か新鮮だな・・・
まだ人の少ない道も公園も。
校舎なんか時間が止まってるように感じる。
「はぁ～やっと着いた～」
自分の席に腰をおろした。
電気をつけるのがもったいないくらい外の光がきれいだった。
グラウンドでは野球部が練習してる。
吹奏楽部のきれいな音色も聞こえてくる。
なんか、こうゆうのいいな。
ガラガラッ
え？もう誰か来ちゃったの？？
「え？なんでいんの？」

わ！！今一番会いたくなかったひとだ・・・。
「あ、今日たまたま早く起きちゃって、たまにはいいかなと思って・・・一輝くんは？」
「俺は・・・・別に・・・」
「そ、そうなんだ・・・」
や、やばい・・・・気まずすぎる！！
こんなことなら昨日なにかしら返信しとけばよかった・・・
「あのさ・・・・」
「は、はい？！」
あ、やば！声裏返ったかな・・・
「みあ、好きな人いんの？」
好きな人・・・・・？
「い、いないです・・・・」
いない・・・・。
いないはずなのに胸が痛んだ気がした。
「そ、そっか。」
どれ位かわかんないけど、長く感じる沈黙が続いた。
「あ、俺バイトあるから。じゃあな♪」
「うん、ばいばい」
やっとこの空間から開放される！
と思ってたら、一輝くんがいきなり振り返った。
「昨日のこと、俺本気だから。」
そう言って一輝君は教室を出て行った。
一輝くん、いつもは優しそうに笑ってるのに
さっきすごく力強い瞳だった。
少し圧倒された。
それからまた時間は過ぎていって、
教室にどんどん人が増えていった。
私の頭の中には一輝くんとなぜか忘れられない秋斗先輩がいた。

「え?!一輝くんに告られた?!」
「ちょっ!桃花声でかいって!!」
「あ、ごめんごめん（笑）。」
その日の昼放課に桃花に一輝くんのことを話した。
「そんで、なんて返事したの?」
「それがさ・・・」
私は返事できなかったことも、
今朝一輝くんに言われたことも、
そして、ずっと引っかかってる秋斗先輩のことも桃花に話した。
「ふ～ん・・・ぢゃあ、みあは秋斗先輩のことが好きなんだ。」
「そんなんじゃないよっ!話したこともないんだし・・・」
そう。秋斗先輩とは話したこともないし、たぶん秋斗先輩は私のことを知らない。
そう思うとまた胸が痛んだ。
「みあ?一目惚れって言葉あるんだよ?」
“一目惚れ”・・・・・・
あ、そうか。
秋斗先輩に一目惚れしたんだ。私。
そう思うと全ての謎が解けた。
「桃花・・・?」
「なぁに?」
「私、たぶん初めて男の人好きになったんだ。しかも一目惚れで。」
「人を好きになるのに一目惚れとかそんなの関係ないとおもうよ?」
桃花は恋愛経験が豊富。
だからたぶん間違いなく私を見透かしてる。
私本当に好きなんだ・・・・・秋斗先輩のこと。
「んでさ、早めにきちんと断らないとダメだよ?」
「へ・・・・?」

「へ？じゃなくて！一輝くんのこと。」
「あ・・・・・。」
「後にのばせばのばすほど断れなくなるよ？」
「・・うん・・わかったよ。」
私が秋斗先輩のことを好きなこの気持ちと同じくらい、
もし一輝くんが私のことを今好きでいてくれているなら。
そう考えると私は過ぎていく時間を忘れてしまっていた。

断らなきゃ。
頭で出た答えを行動に移すのがこれほど難しいのは
生まれて初めてだった。
それでも私は一輝くんの想いに答えられない。
秋斗先輩が好き。
この気持ちに気づいたから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2459z/

ひとめぼれ

2011年12月11日15時49分発行